

三島由紀夫の歴史認識 ——1960年代の三島のテキストを中心に——

洪 潤 杓

Mishima Yukio's Historical Awareness: Mishima's Works from the 1960s

Hong Yunpyo

Mishima Yukio's ritual suicide in the Ground Self-Defence Forces' Ichigaya Garrison on November 25th, 1970 echoed throughout Japan and the world. It is widely known that Mishima was an ultranationalist and ardent worshipper of the emperor; however, this awareness is primarily due to the lasting impressions his "death" left. The question then arises as to whether or not he had always worshipped the emperor, and if not, it is then necessary to question why he became one.

In order to answer this simple question, this paper examines three of Mishima's works – *Yūkoku*, *Utsukushii hoshi* and *Eirei no koe* – from an historical, sociological and cultural perspective. In considering his work in light of the historical conditions of the 1960s, it is possible to establish the formative process of his historical awareness. In the bewildering chaos of the post-war 1960s, Mishima explored his own identity, and in order to escape this uncertain status, sought an absolute foundation or strength.

1. はじめに

三島由紀夫は『花ざかりの森』『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』などの作品で知られている作家であり、作家活動以外でも、映画出演、写真集発刊、インタビューや対談での大胆な発言などで注目を集める存在であった。そして、最後には陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で衝撃的な割腹自殺を遂げ、日本

国内だけでなく外国にまで大きな反響を呼び起こした人物でもある。

三島由紀夫は、あまりにも有名な作家であるため、数多くの学者により、広く研究されてきた。三島由紀夫についての膨大な研究成果を一定の傾向で捉えるのは非常に難しいが、これまでの研究においては、専ら、作家三島由紀夫と彼の作品に表れた思想に注目した研究が主流をなしてきたといえる。しかし、三島由紀夫の生い立ちや芸術論、そして、作品の美意識を追究するこれらの研究は、いわゆる三島由紀夫伝説に収斂するきらいがあるという印象は否めない。

三島由紀夫伝説が形成された理由は、三島由紀夫の「死」があまりにも強い印象を与えたからだと考えられる。そのために、多くの研究が、三島の「死」を究明する方向へ走ってしまったといえよう。三島由紀夫の「死」以後の研究は、否応なしに彼の「死」を語らなくてはならなくなり、彼の作品、行動などを、彼の「死」から、遡及的に考察するのが常となったのである。さらに、三島の死後、数々の著名な学者により綴られた三島由紀夫評伝¹⁾は、「気鋭の青年作家」、「文武両道を実践した行動家」といった一面的な三島像を確立し、彼のほとんどの作品を三島の「死」を予言するものとして捉えてきたのである。

たとえば松本道介は、二・二六事件を背景とし、割腹自決を遂げた武山中尉を描いた「憂国」を論ずるにあたって、「『憂国』を書くことによって三島はみずからの切腹を前もって体験してしまった²⁾」と語り、作品を三島の「死」と結びつけて論じている。また、小川和佑は、剣の世界に取り組む「次郎」が、自殺へと至る過程を描いた、「剣」について、「『剣』はその

1) 三島由紀夫評伝には、ジョン・ネイスン『三島由紀夫—ある評伝』（野口武彦訳、新潮社、一九七六年）、佐伯彰一『評伝 三島由紀夫』（新潮社、一九七八年）、村松剛『三島由紀夫の世界』（新潮社、一九九〇年）、奥野健男『三島由紀夫伝説』（新潮社、一九九三年）、猪瀬直樹『ペルソナ 三島由紀夫伝』（文藝春秋、一九九五年）橋本治『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』（新潮社、二〇〇二年）などがある。

2) 松本道介「三島由紀夫というドラマ」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇〇年十一月号

後の三島の生涯を決し、予告するものであった』³⁾と述べ、テキストを三島に関する既存の言説に収斂させている。このような例には枚挙に暇がない。『金閣寺』の溝口、『鏡子の家』の四人の青年、『禁色』の俊輔等々、多くの論が、三島の作品の登場人物を、三島由紀夫の姿が投影されている人物、あるいは三島の思想を直接的に表している人物として捉えている。

無論、そのような観点は三島由紀夫の作品を理解するための、非常に有効な視点を提供してくれる。しかし、これらの研究が、三島由紀夫に対する固定観念を強化して、テキストの多様な読みを抑圧し、妨げてきたことも指摘されなければならない。

本論文は、三島の「死」から三島のテキストを考察する遡及的な研究方法を脱して、歴史的・社会的・文化的視点から、三島のテキストを読み直し、三島由紀夫の歴史認識について考察を加えようとするものである。特に、1960年代の歴史的状況と彼のテキストを考察すると、三島の歴史認識が形成する過程を確認することができる。

三島は、常に同時代の政治的・文化的状況に対して敏感に反応しながら、現実に抵抗しつづけた作家である。だからこそ、彼のテキストは、同時代の空気と緊密に呼吸しながら、時代とダイナミックに関わり合っていたはずである。

このような考察は、現在もなお影響力を持ち、歴史問題、アイデンティティ問題などの現在進行中の諸問題に、示唆を与えうる作家として、戦後日本における三島由紀夫の位置づけを新たにすると考えられる。

2. 三島由紀夫の「憂国」

一九六一年、『小説中央公論』冬季号に発表された三島由紀夫の「憂国」

3) 小川和佑「三島由紀夫論—短編「剣」の意味するもの」『解釈』教育出版センター、一九七一年四月号

は、一九三六年二月二十六日に起った青年将校達の反乱事件である二・二六事件を背景にした短編小説である。三島由紀夫はこの「憂国」および「十日の菊」（一九六一）、さらには「英霊の声」（一九六六）を「二・二六事件三部作」と名付け、これら三つの作品は、後に『英霊の声』（河出書房新社、一九六六年六月）として出版されることになる。

「憂国」はこの三部作の中でもとくに重要な位置を占めている作品である。その理由は、この作品が野坂幸弘が指摘したように「二・二六事件への傾斜において、著しい政治的尚武的志向の起点に自ら位置づけられ」⁴⁾ からである。

三島も自ら、「『花ざかりの森・憂国』解説」（一九六八）において、「憂国」の重要性に触れ、「憂国」は彼にとって「もっとも切実な問題を秘めたもの」と述べ、かつ、「もし、忙しい人が、三島の小説の中から一編だけ、三島のよいところ悪いところすべてを凝縮したエキスのような小説を読みたいと求めたら、「憂国」の一編を読んでもらえばよい」⁵⁾ とまで述べている。

さらに三島は、一九六五年に出版された『三島由紀夫短編全集』第六卷（講談社）の「あとがき」において、次のように語っている。

私の作品を今まで一度も読んだことのない読者でも、この「憂国」といふ短編一編を読んで下されば、私といふ小説家について、あやまりのない観念を持たれるだらうと想像する。そこには、小品ながら、私のすべてがこめられてゐるのである。⁶⁾

以上のことから、三島が「憂国」に強い愛着を抱いていたこと、さらに、

4) 野坂幸弘「『憂国』」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、二〇〇〇年十一月号、107頁

5) 三島由紀夫「『花ざかりの森・憂国』解説」『花ざかりの森・憂国』新潮文庫、1968（『決定版三島由紀夫全集35』新潮社、176頁）

6) 三島由紀夫「あとがき」『三島由紀夫短篇全集6』講談社、1965（『決定版三島由紀夫全集33』新潮社、415～416頁）

「憂国」が「二・二六事件三部作」を考察するさいに重要であるばかりか、三島文学の全体の道程を理解するさいにも重要な役割を果たすテキストである、という二点が確認できる。

また、江藤淳は一九六〇年十二月二十日、朝日新聞紙上に「この短編はおそらく三島氏の作品のなかでも秀作の部類にはいるものでであろう」としたうえで、「三島氏が試みているのは、このような政治的異常時の中心をエロティシズムの側面からとらえようとすることで、その意図は見事に成功している」⁷⁾とのべ、「憂国」を高く評価した。

「憂国」のあらすじは簡単である。主人公の武山中尉は二・二六事件の勃発以降、親友が反乱軍に加入したことに「二日にわたる永い懊悩」を重ねる。親友たちは武山中尉が新婚であることを配慮して、武山中尉を反乱軍からはずしたのである。中尉は家に帰ってきて、夫人の麗子に「俺は今夜腹を切る」と自分の決意を伝え、麗子は躊躇なく「お供をする」と答える。二人の喜びは「あまり自然にお互ひの胸に湧き上がったので、見交はした顔が自然に微笑」む。そして、最後の情事後、武山中尉は割腹自殺をし、麗子夫人も夫に殉じて自刃を遂げる。

三島由紀夫の「憂国」は、最後に「一九六〇、一〇、一六」と日付が付いていることから、脱稿した日付がわかる。それでは、三島由紀夫はなぜ、一九六〇年という時点で、二十四年前の二・二六事件を書くようになったのか。次節では、一九六〇年代の日本の状況について考察する。

3. 一九六〇年代の政治的・文化的環境

1) 「皇太子のご成婚」

一九五六年の『経済白書』には「もはや戦後ではない」とあるが、それ

7) 江藤淳「エロスと政治の作品—三島、大江が共通の主題」『朝日新聞』、一九六〇年十二月二十日、七面

は、一九五四年から一九五七年の間の神武景気と呼ばれる好景気と同じ時期である。「もはや戦後ではない」という言葉は、敗戦によって廢墟になった日本が、戦後復興に完全に成功したという自信感の表れといえる。

日本が高度経済成長を続けていった、一九五九年四月一〇日には、昭和天皇の息子である明仁と、初の民間出身の皇太子妃である正田美智子との盛大な結婚式が行われた。この結婚は、単に一出来事にとどまるものではなく、歴史的・文化的に非常に重要な意味を持つイベントとして評価されている。

加藤典洋は「一九六〇年前後の「天皇」に関する血腥い出来事が、右翼・天皇信奉者の側の危機感の高まりの産物だとして、それを彼らにもたらしめているのは、一九六〇年の「運動」であると同時に一九五九年の「結婚」である。というより、その深度からいえば、前者である以上に後者なのだ⁸⁾と述べている。この加藤の指摘を言い換えれば、一九六〇年前後に右翼により相次ぎ起こされたテロ事件は、右翼の危機意識から出たが、その危機意識は一九六〇年の安保闘争と、一九五九年の皇太子結婚に起因する。その重要度から考えると、安保闘争より、むしろ皇太子の結婚のほうが右翼にはもっと大事な問題であったということになるだろう。

安保闘争が社会党、日本共産党、全学連など、いわゆる左派により主導されたので、右派の結束を招来したという評価が一般的であるが、その裏面にはもっと大事な「皇太子の結婚」をめぐる問題が隠されているのである。この問題には注目する必要がある。

一九五九年の皇太子の結婚は大衆天皇のイメージを構築した画期的な出来事であった。史上初の平民出身の皇太子妃である美智子は空前の「ミッチーブーム」を巻き起こし、連日マスコミに報道された。『平凡』や『明星』のような大衆雑誌も、美空ひばりや石原裕次郎、高倉健などの当代のスターと並んで皇太子妃の写真を載せるなど、完全にスター扱いするよう

8) 加藤典洋「一九五九年の結婚」『日本風景論』講談社、1990、55頁

になった⁹⁾。このような現象は、敗戦以前には想像もつかなかった親近な天皇家のイメージを創りあげ、国民に近づいていく大衆天皇のイメージを固める役割を果たした。

皇太子の結婚に際して行われた『朝日新聞』一九五九年二月二六日の世論調査は、戦後日本の皇室と国民との関係を見定めるために重要な意味をもつデータを提示している。まず「皇太子さまのご結婚相手はだれでしょうか」という質問に、「正田美智子」の名を答えた人が、94%もあるが、これは「ミッチーブーム」がどれほど熱かったのかを表す数字であると言わざるをえない。そして、「皇太子さまのご結婚のお相手が正田美智子さんという民間の人であることは、よいことだと思いますか、よくないことだと思いますか」という質問には、「よい」と答えた人が87%で、「よくない」と答えた人は4%に過ぎなかった。「よい」と答えた理由は、「民主的で時代にふさわしいから」が23%、「皇室が国民に近づき、親しみがましたから」が30%で、この二つの理由が半分以上を占めているのを見ると、「ご成婚」が、戦後日本の民主主義そのものを象徴する事件であったことが分かる¹⁰⁾。

皇太子妃の美智子は、初の平民出身の皇太子妃という点以外に、巨大資本会社である日清製粉創業者の娘という点において、重要な象徴的な意味を持っている。すなわち、皇室と資本との結合という意味を内包しているのである。安田常雄は、「皇太子結婚」の意味について「戦後天皇制は「平民」「恋愛」「家庭」の三つのシンボルによって、新中間層を軸とする大衆社会状況と結合し、また「独占資本」との「結婚」をテコに高度成長の象徴として浮上した¹¹⁾と指摘している。

一方、加藤典洋は一九五九年の皇太子結婚を「文字通り「人間」の位置にまで降下した天皇と「市民」の位置にまで上昇した旧臣民（国民・庶民）

9) 当時、スター扱いされた皇太子妃の人気については、松下圭一「大衆天皇論」（天野恵一編『大衆社会と象徴天皇制』社会評論社、1995）80-98頁を参照。

10) 「いまの皇室をどう思うか 本社全国世論調査」『朝日新聞』1959年2月26日5面

11) 安田常雄『象徴天皇制と民衆意識』『歴史学研究』1991.7、36頁

の合体、にほかならなかった¹²⁾と評価している。

また、皇太子妃の人気は、高度経済成長と相まって新しい風景も生み出した。結婚当日の皇太子結婚の中継をみるため、テレビを購入する者が相次いだのはよく知られている。「ご成婚」の当日は、「電気店の店先やテレビのある食堂、銭湯」に人々が集まり、約1500万人がテレビで「ご成婚」の中継を見たという¹³⁾。このような異様ともいえる、熱狂的な「ミッチーブーム」は、戦後日本の高度経済成長と、資本主義、そして戦後民主主義が生み出した風景であった。

このように「ご成婚」を歓迎する人が大多数であったが、三島由紀夫は、左翼が天皇に対して悪いイメージを持っているのは「目に見える天皇像があまりにも週刊誌に毒され、マス・コミュニケーションに毒されてある、その毒された媒体を通じてしかこれを評価し得ない¹⁴⁾からであると指摘し、大衆的な天皇制について否定的な意見を表した。

また、三島は、大衆に親しみを感じさせる天皇制の問題に触れ、「ディグニティをなくすることによって国民とつなく¹⁵⁾こと自体が間違いであると断言している。あくまでも皇室の権威をなくす、戦後の大衆天皇制は、三島の考えた理想的な天皇制とは相反するものであった。特に、皇室の権威をなくすことに決定的な役割を果たした「皇太子の結婚」は、三島にとっては歓迎できない戦後日本のお祭りであった。

2) 安保闘争

そして、「皇太子のご成婚」のあった一九五九年から盛りあがりを見せていた安保闘争だが、一九六〇年五月十九日、自民党はついに衆議院に警官

12) 加藤典洋「一九五九年の結婚」『日本風景論』講談社、1990、78頁

13) 加納実紀代『天皇制とジェンダー』インパクト出版会、2002、68頁

14) 三島由紀夫「砂漠住民への論理的弔辞—討論を終えて」『討論 三島由紀夫 vs. 東大全共闘』新潮社、1969（『決定版三島由紀夫全集35』新潮社、487頁）

15) 三島由紀夫「早稲田大学大隈講堂でのティーチ・イン」1968. 10. 3.（『決定版三島由紀夫全集40』新潮社、270頁）

隊を導入、単独で新安保条約を強行採決し、安保闘争は燎原の火のように、全国的に広がった。五月二十日には、全学連が首相官邸になだれこみ、警官隊と衝突し、六月十日には、ハガチー事件が起こった。六月十五日には、学生約七千人が国会に突入、警官隊、右翼団体と流血の乱闘、東大生の樺美智子が死亡する事件が起こり、闘争はより激しくなり、絶頂に至ることになった。六月十八日には参加する市民の数が増え、三十三万人が国会デモ、徹夜で国会を包囲する事態に至った。しかし、こういった猛烈な反対にもかかわらず、六月十九日には、新安保条約・協定が自然承認することになる。

以上のような安保闘争の最中で、三島はただ事態の推移を見守っていた。そして、一九六〇年六月二十五日には、『毎日新聞』に「一つの政治的意見」という文を寄せたのである。

私はこのごろ、請願デモを見、ハガチー・デモの翌日の米大使館前における右翼デモを見、六月十八日夜には、安保条約自然承認の情景を国会前で見た。私は自慢じゃないが一度もデモに参加したことはなく、これはあくまで一人のヤジ馬の政治的意見である。いま発表されてゐる政治的意見は、すべて何らかの意味で「参加者」の意見である。一人くらのヤジ馬の意見があつてもよからう。¹⁶⁾

ここで、三島は、あくまでも傍観者的な立場を保っていることを主張しながらも、「参加者の意見」を縮小しようとしている。三島は、同じく「一つの政治的意見」において、岸信介首相の官邸を取り囲んだデモ群衆について、「岸が何となくきらひ」で、デモに参加してゐる人は多からう。ところが「岸が何となくきらひ」といふ心理は、容易に「だれそれが何とな

16) 三島由紀夫「一つの政治的意見」『毎日新聞』1960.6.25。（『決定版三島由紀夫全集 31』、新潮社、433頁）

く好き」といふ心理に移行する。来るべき総選挙に、私はかうした皮膚感的投票の増加するのをおそれる¹⁷⁾といい、あえて愚かな群衆のイメージを与えている。

そして、ここで述べている「来るべき総選挙」とは、一九六〇年十月二十四日のいわゆる「安保解散」により、十一月二十日に行われた衆議院議員総選挙を指すのであろう。ここで注目すべきことは、三島が総選挙の結果を気にしていたという点である。結果は、保守の自民党が議席を増やし、好成績を挙げたが、それは三島が「一つの政治的意見」を毎日新聞に寄稿した六月二十五日には、安保闘争を通して革新陣営が力を得ていた時期であって、予想できなかったことであつた。¹⁸⁾

千種キムラ・スティーブンは、「二・二六事件の青年将校たちは日本が「左翼思想等によつて浸食され」ていると懸念し、特に「二月二十日の総選挙に於て、国民の多数が、ファシズムへの反対と、ファシズムに対する防波堤としての岡田内閣の擁護とを主張し」「無産党」も進出したことに危機感をいだき、決起したことである¹⁹⁾と指摘し、総選挙の結果に対しての危惧を二・二六事件の原因の一つとして挙げている。こういった点においても、一九三六年と一九六〇年は照応しているのである。

3) 安保闘争をめぐる左右の対立

一方、安保闘争が社共両党、総評、全学連などの左翼勢力によって主導されたため、共産主義革命が起こるといふ危機感が現実味を帯びようになり、この時期を境に全愛会議、三曜会、青思会などの連合体をはじめ、日本国粋会、大日本国民党、日本青年連盟、日の丸青年隊など行動右翼団

17) 同上、435頁

18) 白鳥令『保守体制(上)』、東洋経済新報社、85～91頁、西平重喜『日本の選挙』、至誠堂、77～92頁参照

19) 千種キムラ・スティーブン『三島由紀夫とテロルの倫理』、作品社、二〇〇四、128頁

体が組織され、ピラまきや、演説やデモの妨害活動を展開した。²⁰⁾

一九六〇年に起こった右翼団体による主要な事件だけを挙げてみても、一九六〇年三月六日の三井三池闘争衝突事件、三月十四日には、浅沼社会党書記長暴行事件、四月二日には、毎日新聞社衝撃事件、六月四日には、安保阻止デモ暴行事件、六月十五日には、維新行動隊突入事件、六月十七日には、河上社会党代議士刺傷事件などが相次ぎ、七月十四日には、岸信介元首相が右翼の人物である荒牧退助に襲われる暗殺未遂事件が起こった。

三島は岸元首相刺傷事件について、一九六〇年九月号の『婦人公論』「巻頭言」で触れている。この文の最後に「やはり暗殺なんてものは、ないほうがよいのである」と言いながらも、「岸信介氏が刺客におそはれてから、日本もふたたび暗殺時代に入ったやうなイヤな予感に襲はれてゐる人が多い。しかしこの位政治が混迷してゐると、そのマイナスばかり言つてゐるのも片手落ちである。少なくとも一部の政治家には、かういふ事件がいい薬にならうし、政治が命がけの仕事となれば、少しは政治家の背骨もシャッキリするだらう、といふことも考へられる」²¹⁾と述べ、右翼テロ事件に対して完全に否定的とはいえない反応を見せているのである。

十月十二日には、東京の日比谷公会堂で行われた三党首大演説会で、演説中であつた浅沼社会党委員長が、突然演壇にかけあがつた若い男に、刺殺される事件が起こった。犯人は十七歳の山口二矢で、現場で逮捕されたが、十一月二日、刑務所で自殺した。

大江健三郎はこの事件からモチーフを得て、「セヴンティーン」を一九六一年一月に『文学界』に発表し、その続編である「政治少年死す」を一九六一年二月に同じ『文学界』に発表したが、右翼団体などから猛烈な抗議を受け、これらの作品はその後の刊行本に収録されていない。

一方、深沢七郎は『中央公論』一九六〇年十二月号に「風流夢譚」を発

20) 猪野健治『日本の右翼』、日新報道、一九七三、334頁

21) 三島由紀夫「巻頭言」『婦人公論』中央公論社、1960年4月号（『決定版三島由紀夫全集31』新潮社、319頁）

表したが、この小説は、日本に「左欲革命」²²⁾が起き、天皇一家が革命軍に襲われ、殺害されるという夢の話である。ここで描かれている天皇一家の殺害場面が問題とされ、右翼団体から激しい抗議を受けるようになった。結局、一九六一年二月一日、「風流夢譚」を掲載した中央公論社の嶋中鵬二社長邸に、元大日本愛国党員の小森一孝（当時十七歳）が無断で上りこみ、家政婦を殺し、社長夫人に重傷を負わせた「嶋中事件」が起こり、中央公論社は「風流夢譚」を掲載したことについて謝罪記事を出すことになった。

このように、三島由紀夫の「憂国」と全く同じ時期に、「天皇」・「愛国」に関する主題を扱う「セヴンティーン」、「政治少年死す」、「風流夢譚」などの問題作が発表されたことは、非常に意味深い。安保闘争を経て「天皇」・「国家」に対する観念が再構築され、文学の場でもそれらが新たな形で表象されることになったのである。

また、安保闘争の時期に「今までの型にはまった運動方式でなくて、自分たちで考えた運動方式」を目指し、江藤淳・浅利慶太・石原慎太郎・大江健三郎・開高健・武満徹・寺山修司・谷川俊太郎など、若手の芸術家や作家が集まった「若い日本の会」が組織されたこと²³⁾を見ても、いかに当時の文学者が安保闘争に積極的にかかわっていったかという事実がわかる。

4) 性の解放

一九六〇年に安保闘争を皮切りに、政治的問題で日本中が大騒ぎになった一方、戦後には「性の解放」ともいえる劇的な変化が見えてくる。戦後の性言説の変化を概略してみると一九四六年には『完全なる結婚』が出版され、ベスト・セラーになる²⁴⁾。一九四九年には雑誌『夫婦生活』が創刊さ

22) 深沢七郎は「風流夢譚」において、左翼革命を連想させる「左欲革命」という言葉を使った。

23) 小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞』、新曜社、二〇〇二、516頁

24) 敗戦後に大きな影響を与えた性科学書。あまりにも人気があったため、次々と『完全なる愛情』『完全なる日本人夫婦の結婚生活』『完全なる夫婦の生活』『完全なる結婚生活』などの重流が出版された。(山本幸正「敗戦後と「性の解放」」(『昭和文学

れ、性にかかわる記事に接しやすくなる。一九五〇年にはD・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』の訳書が出版され、一九五二年には『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳が東京地裁で有罪判決を受け、また、一九五七年には最高裁で有罪判決が確定するが、この裁判に対し、文芸家協会が抗議声明書を発表することになる。一方、一九五五年には石原慎太郎の『太陽の季節』が芥川賞を受賞し、全国的に太陽族が流行することになった。一九五六年には売春防止法が成立し、一九五八年に売春防止法が施行されることになったが、この法の実施はむしろ、自由意志の恋愛が主になる現象を招いたのである。その結果、見合い結婚より恋愛結婚が増加することになった²⁵⁾。三島も『婦人公論』一九六〇年四月号の「巻頭言」において、早婚の原因の一つとして売春禁止法を挙げている。²⁶⁾

そして、安保条約の自然成立した日から、わずかに一週間後である一九六〇年六月二十五日に『性生活の知恵』初版が出版されたが、初版発行からわずか二年半で一〇〇万部を超える大ベストセラーとして話題になった。²⁷⁾

安保闘争という巨大な政治の流れに並行して、このような「性の解放」や「恋愛意識の変化」などといったごく私的領域ともいえる所での動きがあった、ということは注目に値する。

上野昂志は、大江健三郎の「セブンティーン」と三島由紀夫の「憂国」の共通点を「エロスと暴力あるいは死を媒介してある種の「超越性」に至る道筋を描いたこと」²⁸⁾であると指摘しているが、両作品とも、相反しているように見える暴力や死を同伴する「政治」の領域と、「性」という領域との結合を表現していると思受けられる。

研究』、昭和文学会、二〇〇四年三月、62～65頁)

25) 歴史学研究会『日本同時代史3 五五年体制と安保闘争』、青木書店、一九九〇、251頁

26) 三島由紀夫「巻頭言」『婦人公論』中央公論社、1960年4月号（『決定版三島由紀夫全集31』新潮社、313～314頁）

27) 上野昂志『肉体の時代』、現代書館、一九八九、108頁

28) 同上、16頁

4. 「憂国」のモチーフ

以上のような同時代状況の中で、三島は「時代錯誤的」ともいえるような小説を発表した。それでは、「憂国」のモチーフは何だったのか。そのモチーフとして、次の四点を挙げることができる。

まず、三島由紀夫は同時代の人々が二・二六事件の青年将校たちを批判的に評価していることに対する不満を「二・二六事件について」において次のように述べている。

もつとも通俗的普遍的な二・二六事件観は、今にいたるまで、次のやうなジャーナリストの一行に要約される。

「二・二六事件によつて軍部ファッショへの道がひらかれ、日本は暗い谷間の時代にはいりました」²⁹⁾

ここで三島は、二・二六事件に対する一般的な認識には同意しない、という自らの立場を明らかにしている。さらに、「二・二六事件について」のなかには、次のような記述もある。

二・二六事件を肯定するか否定するか、といふ質問をされたら、私は躊躇なく肯定する立場に立つ者であることは、前々から明らかにしてゐるが、その判断は、日本の知識人においては、象徴的な意味を持つてゐる。すなはち、自由主義も社会民主主義者も社会主義者も、いや、国家社会主義者ですら、「二・二六事件の否定」といふところに、自分たちの免罪符を求めてゐるからである。この事件を肯定したら、まことに厄介なことになるのだ。現在只今の政治事象についてすら、

29) 三島由紀夫「二・二六事件について」『週刊読売』読売新聞社、1968.2.23。（『決定版三島由紀夫全集34』新潮社、658頁）

孤立した判断を下しつづけなければならぬ役割を負ふからである。³⁰⁾

上の引用から分かるように、三島は二・二六事件に対して、マルクス主義的歴史観に代表される同時代の歴史認識と、また、多くの同時代の知識人とは、全く異なった歴史観を有していたのである。このことは、三島の作家活動において非常に重要な意味を持っている。三島にとって、それは時代に対する抵抗意識の現れであり、文学作品の創作のモチーフになるからである。三島は歴史や現実の問題を既存の歴史認識や理性的推論に基づくことではなく、形而上学的に理解し、それを架空の世界に表現してきた。すなわち、彼は、二・二六事件に正当な評価が下されていないという、現実世界への不満を虚構の世界において解消しようとしたのである。

二番目は、価値観が覆っているという危機感である。その危機感の原因としては、過去の天皇観を完全に変えてしまったような「皇太子のご成婚」、戦後日本の価値観を揺るがした「安保闘争」、そして、「〈性〉の解放」、「個人主義の蔓延」、「全体性の喪失」などがある。

1960年代に入って、戦前の価値が否定され、拠り所を失くしたという認識が危機感を、呼び起こしたが、「憂国」は、こういった危機感から来る「断絶」を克服し、「連続性」を取り戻そうとする欲望の表れだといえる。

そして、三番目は、「死の美学」ともいえる「ジョルジュ・バタイユ」のエロティシズムに対する共鳴である。

三島由紀夫は「二・二六事件と私」において、「直接にはこの確信（至福の死）にこそ、私の戦争体験の核があり、又、戦争中に読んだニーチェ体験があり、さらに又、あの「エロティスムのニーチェ」ともいふべき哲学者ジョルジュ・バタイユへの共感があつた」と述べ、『『エロティシズム』書評』においては、バタイユの『エロチシズム』の内容について、次のように記している。

30) 同上

まづ、生の本質は非連続性にあるという前提から出発する。固体分裂は、分裂した個々の非連続性をはじめるのみであるが、生殖の瞬間のみ、非連続の生物に活が入れられ、連続性の幻影が垣間見られる。しかるに存在の連続性とは死である。かくてエロチシズムと死とは、深く相結んでゐる。「エロチシズム」とは、われへの生の、非連続の形態の解体である。³¹⁾

上の引用によると、三島由紀夫の共感する「エロティシズム」とは、「生」の「非連続性」を解体し、「連続性」を付与するものである。また、「連続性」という側面からみると、「エロティシズム」は「死」と密接な関わりがあると述べている。三島が「二・二六事件と私」で「昭和の歴史は敗戦によつて完全に前期後期にわけられたが、そこを連続して生きてきた私には、自分の連続性の根拠と、論理的一貫性の根拠を、どうしても探り出さなければならぬ欲求が生まれてきてゐた」³²⁾と述べたことと合わせて考えると、三島にとって、「連続」という概念は、生の意義を支持してくれる肝心の哲学原理をなしていることがわかる。ここから、「エロティシズム」が「個々」の非連続性だけでなく、「戦前」と「戦後」といった歴史的「断絶」の解体にも繋がる可能性が見えてくる。三島は続けて「私は私のエステティックを掘り下げにつれ、その底に天皇制の岩盤がわだかまつてゐることを知らねばならなかつた」と述べ、「自分の連続性の根拠と、論理的一貫性の根拠」を天皇制から探ろうとする姿勢を明らかにしている。すなわち、三島は、断絶された歴史の連続性を「天皇制」から、個々の連続性を「エロティシズム」と「死」から見つけようとしたのである。「天皇制」、「エロティシズム」、「死」は、「連続性」という点から相通じ、三島におい

31) 三島由紀夫「『エロチシズム』—ジュールジュ・バタイユ著 室淳介訳『声』1960年4月号（『決定版三島由紀夫全集34』新潮社、116頁）

32) 三島由紀夫「二・二六事件と私」『英霊の声』河出書房新社、1966年（『決定版三島由紀夫全集34』新潮社、116頁）

て「エロティシズム」が「政治」といった問題と結合せざるをえない必然性は、「連続」という概念から端を発しているのであろう。

最後は、連続性の美学ともいえる問題であるが、それは、次の「憂国」の一節から読み取ることができる。

麗子の体は白く厳そかで、盛り上がった乳房は、いかにも力強い拒否の潔らかさを示しながら、一旦受け入れたあとでは、それが瞬の温かさを湛へた。かれらは床の中でも怖ろしいほど、厳粛なほどまじめだつた。おひおひ烈しくなる狂態のさなかでもまじめだつた。（中略）

これらのことはすべて道徳的であり、教育勅語の「夫婦相和シ」の訓へにも叶つてゐた。麗子は一度だつて口ごたへはせず、中尉も妻を叱るべき理由を何も見出さなかつた。階下の神棚には皇太神宮の御礼と共に、天皇皇后両陛下の御真影が飾られ、朝毎に、出勤前の中尉は妻と共に、神棚の下で深く頭を垂れた。捧げる水は毎朝汲み直され、榼はいつもつややかに新しかつた。この世はすべて厳粛な神威に守られ、しかもすみずみまで身も慄へるやうな快樂に溢れてゐた³³⁾。

上の引用は、日常の夫婦関係を描写する箇所であるが、夫婦官能のエロティシズムが「教育勅語」の「夫婦相和シ」の公的領域の訓えという枠内からめとられているのがわかる。

すなわち、一九三六年の「教育勅語」と一九六〇年の「憂国」とは、私的領域が公的領域により掬い取られる形で、合一と融合の作用が働いている点において照応しているのである。

但し、「教育勅語」が、公的原理が先にあって、その公的原理が私的生活を規制するのに対し、「憂国」は夫婦愛という私的領域から出発し、私的領

33) 三島由紀夫「憂国」『小説中央公論』1961年1月冬季号（『決定版三島由紀夫全集20』新潮社、15～16頁）

域が「大義」という公的領域に繋がっているのである。言い換えれば、「憂国」における、自発的な「大義」は、エロティシズムの極致であり、至福に導くものである。

教育勅語の教えに忠実に従う武山中尉夫婦に体现されているように、「憂国」において、「大義」、「エロティシズム」、「死」の融合は、個々の断絶、歴史の断絶、「公」と「私」の断絶を克服し、「連続性」を保たせる美意識である。

以上のように、三島由紀夫は、自ら政治に興味がないと述べ、実際に現実の問題を彼特有の観念の世界に埋め込む傾向を持っていたとはいえ、常に安保闘争の推移に興味を持ち、その感想を新聞や雑誌に寄稿してきたのである。そして、一九六〇年の状況が、一九三六年の状況と照応していると捉え、安保闘争期に、二・二六事件を喚起させる「憂国」を発表したのである。また、戦後成長期を迎えた日本社会に、性観念における劇的な変化が現れた時期に、「連続性」といった彼特有の「エロティシズム」の解釈を通して、「政治」と「エロティシズム」とが融合する美意識を描こうと試みたのである。このような時代の動きの中で発表された「憂国」は実に時宜適切であったといえよう³⁴⁾。

5. 「日本伝統の発見」

一九六〇年代に入り、安保闘争の影響で「憂国」を発表し、作品の世界で始めて尚武的傾向を表した三島は、以後、戦後の状況に対する意識を常に変化させていった。同じ「二・二六事件三部作」の中でも、一九六〇年に書いた「憂国」と一九六一年に書いた「十日の菊」では、二・二六事件の青年将校たちを神格化しようとする姿勢はそれほど見られない。しかし、

34) 「憂国」の連続性の問題に関する詳細な分析は拙論「三島由紀夫「憂国」における「ズレ」」(『文学研究論集』筑波大学、2006年7月)を参照。

一九六六年に発表した「英霊の声」においては、二・二六事件の青年将校たちを「英霊」とまで呼び、神格化しようとしている。また、作品の口調もより激しくなっている。それは、「憂国」から「英霊の声」までの時期が、三島にとって揺るぎない絶対的な価値観を模索する過程であったということ物語る。絶対的な拠り所を模索した結果、「日本伝統」や「天皇」という記号に辿り着いたといえるだろう。

一九六〇年代初期は、安保闘争の気運が収まり、高度経済成長を謳歌していた時期である。そして、一九六四年には、戦後最大のイベントである東京オリンピックが開催され、その準備で騒がしい時期でもあった。このように全体的な流れだけに触れてみても、この時代を生きた日本人は、大きな価値観の変化を経験したであろうと推測できる。

三島は一九五〇年代後半から大衆消費文化に注目しはじめ、一九六〇年代に至るとその興味をさらに深めてゆく。このことは、次の引用で確認することができる。

北米合衆国はすべて美しい。感心するのは極度の商業主義がどこもかしこも支配してゐるのに、売笑的な美のないことである。（中略）いい例がカリフォルニアのディズニー・ランドである。ここの色彩も意匠も、いささかの見世物的佻びしさを持たず、いい趣味の商業美術の平均的気品に充ち、どんな感受性にも素直に受け入れられるやうにできてゐる。アメリカの商業美術が、超現実主義や抽象主義にいかにか口ざはりのいい糖衣をかぶせてしまふか、その好例は大雑誌の広告欄にふんだんに見られる。かくて現代的な美の普遍的な様式が、とにもかくにも生活全般のなかに生きてゐると感じられるのはアメリカだけで、生きた様式といふに足るものをもつてゐるのは、世界中でアメリカの商業美術だけかもしれないのである。通信販売が様式の普及と伝播に貢献し、人々がコンフォルミズムとそれを呼ぼうか呼ぶまいが、アメリカの龐大な中産階級を通じて、家具や台所の設計にまで、あのもの

やはらかな、快適な、適度に冷たい色彩と意匠の美的様式がひろがっている。そして穢らしいグロテスクな骨董で室内を飾り立てることのできるのには金持階級だけである。ジェット機から電気冷蔵庫にいたる機能主義のデザインが、ちゃんと所を得た様式として感じられるのはアメリカだけであらう³⁵⁾。

上の引用は、『新潮』一九六一年四月号に掲載された「美に逆らふもの」というエッセイからの一節である。ここで三島は、アメリカ商業主義の美について述べているが、「平均的気品」、「生活全般のなかに生きてゐる」、「歴大な中産階級」などの言葉から類推できるように、大量生産と大量消費による、大衆消費文化の「均質化」を高く評価している。また、「現代的な美の普遍的な様式」、「様式の普及と伝播」を積極的に評価しているところからは、「均質化」から生み出される「様式化」及び「規格化」を礼賛しているのが見受けられる。ここで三島は、アメリカの商業主義にある種の「全体性」を見出し、「形」に拘った三島の美意識と合致する「形式美」を発見している。ここでは、三島の文章とは思えないほどに、三島はアメリカの商業主義を手放しで賞賛している。

当時は日本全体がアメリカナイズされた時期で、アメリカ的な価値観が絶対的な価値として受け入れられた時期でもある。三島由紀夫もアメリカの大衆消費文化に興味を持ち、アメリカの商業主義を賞賛したりもしたが、結局は、そこから心の拠り所は見つけられずに、「全体性」や「形式美」といった三島の好む美意識だけを取って、日本伝統のほうに目を向けることになる。

その契機の一つは、一九六四年の東京オリンピックであった。三島由紀夫は、日本的なものが失われているのを危惧する形で、その考えを表現した。

35) 三島由紀夫「美に逆らふもの」『新潮』1961年4月号（『決定版三島由紀夫全集31』新潮社、548～549頁）

すべてがオリンピックに集中してゐては、季節感どころではあるまいが、東京の秋は一体どこへ行つてしまつたのか？オリンピックのやうな非常の事態に対抗できるものは、ただわれわれの「しきたり」だけである筈だが、そのしきたりを失つてしまつては、すべてが浮足立つてしまふのはやむをえない。たとへばオリンピック期間中には、十三夜があり、浅草観音の菊供養があり、京都平安神宮の時代祭があり、鞍馬の火祭がある。それを外人にみせるのを目的にするのは卑しく、日本人がかういふ行事を、オリンピックなど吹く風といふ顔で、すまして自分本位にやつてゐたら、どんなに洒落てゐるだらうと思ふのに、天下の歌舞伎座の正面玄関にまで、ウエルカムといふ英語の看板が掲げられるやうになつてはおしまひである³⁶⁾。

「オリンピックのやうな非常の事態に対抗できるものは、ただわれわれの「しきたり」だけである」とあるが、これを見ると、三島もやはりオリンピックを西洋由来のイベントとして認識していること、そして、日本の伝統はその反対側に位置するものであると見なしていることがわかる。上の引用で、西洋起源のオリンピックに対抗できるものとして例えて挙げられた、「十三夜」、「浅草観音の菊供養」、「京都平安神宮の時代祭」、「鞍馬の火祭」が、すべて、福を祈るという宗教性を持つ行事であることには、注目すべきである。

また、三島はオリンピックと同じ年に発表した、「実感的スポーツ論」で、日本伝統について、次のようなことを述べている。

剣道もはじめて五、六年にしかないが、実は中学時代にも、一年間正課で教へられたことがあつた。当時、私の学校では、剣道、柔

36) 三島由紀夫「秋冬随筆」『こうさい』鉄道弘済会広報部、1964年10月号～1965年3月号（『決定版三島由紀夫全集33』新潮社、134頁）

道、弓道、馬術がどれも必修科目であつたが、強ひられたために、どれも好きになれなかつた。なかんづく剣道独特のあのかけ声を、少年の私はきらつた。その何ともいへぬ野卑な、野蛮な、威嚇的な、恥しらずの、なまなましく生理的な、反文明的な、反理知的な、動物的な叫び声は、羞恥心にみちた少年の心を恥づかしさでいつばいにした。あんな叫び声を自分が立てると思ふとたまらない気がし、人が立てるのをきくと耳をおほひたくなつた。

それから二十五年たつた今、今度はまるきり逆に、自他の立てるそのかけ声が私には快いのである。嘘ではなく、そのかけ声が私は心から好きになつた。これはどういふ変化だらう。

思ふに、それは私が自分の精神の奥底にある「日本」の叫びを、自らみとめ、自らゆるすやうになつたからだと思はれる。この叫びには近代日本が自ら恥ぢ、必死に押し隠さうとしてゐるものが、あけすけに露呈されてゐる。それはもつとも暗い記憶と結びつき、流された鮮血と結びつき、日本の過去のもつとも正直な記憶に源している。それは皮相な近代化の底にもひそんで流れてゐるところの、民族の深層意識の叫びである。このやうな怪物的日本は、鎖につながれ、久しく餌を与へられず、衰へて呻吟してゐるが、今なほ剣道の道場においてだけ、われわれの口を借りて叫ぶのである。(中略)……その叫びと一体化することのもつとも危険な喜びを感じずにはゐられない。

そしてこれこそ、人々がなほ「剣道」といふ名をきくときに、胡散くさい目を向けるところの、あの悪名高い「精神主義」の風味なのだ。私はこれから先も、剣道が、柔道みたいに愛想のよい国際的スポーツにならず、あくまでその反時代性を失わないことを望む³⁷⁾。

37) 三島由紀夫「実感的スポーツ論」『読売新聞』1964年10月10日（『決定版三島由紀夫全集33』新潮社、165～167頁）

ここで、「血の叫び」とは、「野卑な、野蛮な、威嚇的な、恥しらずの、なまなましく生理的な、反文明的な、反理的な、動物的な叫び声」であり、それらの言葉は、すべて反近代的な性格を示す言葉である。ここで、三島のいう二十五年前の、中学校時代に聞いた掛け声は、アメリカ占領軍に抑圧される前の戦前の剣道の掛け声である。「自分の精神の奥底にある「日本」の叫び」、そして、「民族の深層意識の叫び」は、敗戦後、抑圧され、表に出ることができなかつたと三島は認識しているのである。「日本の叫び」や「民族の深層意識の叫び」といったものが本当に存在するのか否か、また、剣道が「民族の深層意識の叫び」を表し得るものなのか否かに関しては確かに議論の余地は残るであろう。しかしはっきりしているのは、三島は戦後になって、抑圧された日本固有の精神、いわゆる「日本人の深層意識」を表象しているものとして剣道を再発見、あるいは再構築しようとしたことである。

三島は、天皇に対する概念も、「西洋」、「近代」に対置する概念として想定している。次は、『論争ジャーナル』一九六七年十一月号に掲載された福田恒存との対談での発言である。

三島 近代化の過程のずっと向こうに天皇があるという考えですよ。その場合には、つまり天皇というのは、国家のエゴイズム、国民のエゴイズムというものの、一番反極のところにあるべきだ。そういう意味で、天皇が尊いんだから、天皇が自由を縛られてもしかたがない。その根元にあるのは、とにかく「お祭」だ、ということです。天皇がなすべきことは、お祭、お祭、お祭、お祭、それだけだ。これがぼくの天皇論の概略です。

この引用から、三島にとって天皇は、西洋的な「絶対者」、「神」としての天皇ではなく、「西洋」の反対概念として、また、自分のアイデンティティのための理想的な「天皇像」であることがわかる。

6. まとめ

戦後になってから事後的に発見した「日本伝統」、「天皇」は、三島の歴史認識と深く関わっている。それは、三島が一九六二年に発表した「美しい星」の次の一節から類推することができる。

一家が突然、それぞれ別々の天体から飛来した宇宙人だといふ意識に目ざめたのは、去年の夏のことであった。この靈感は数日のうちに、重一郎からはじめてつぎつぎと親子を襲ひ、はじめ笑つてゐた暁子も数日後には笑はなくなつた。

わかりやすい説明は、宇宙人の靈魂が一家のおのおのに突然宿り、その肉体と精神を完全に支配したと考へることである。それと一緒に、家族の過去や子供たちの誕生の有様はなほはつきり記憶に残つてゐるが、地上の記憶はこの瞬間から、贗物の歴史になつたのだ。ただいかにも遺憾なのは、別の天体上の各自の記憶（それこそは本物の歴史）のほうが、悉く失はれてゐることであつた。³⁸⁾

「美しい星」において、主人公の重一郎は、UFOを見てから「ばらばらな世界が瞬時にして医やされて、澄明な皆和と統一感に達した」と感じ、自分が宇宙人であると確信するようになる。宇宙人のアイデンティティを持つようになった重一郎は、人間に対し、優越感、使命感を感じるが、自分が宇宙人だと思ふ根拠は、UFOを見たときの「至福の感情」だけで、そこには、具体的な証拠もなく、論理的な理由もない。重一郎が得たこのような至福感は、彼一人だけにとどまらず、彼の家族にいわば伝染し、彼らもその至福感を有するにいたる。

38) 三島由紀夫「美しい星」『新潮』1962年1月号～11月号（『決定版三島由紀夫全集10』、新潮社、16-17頁）

上の引用からわかるように、重一郎だけではなく、家族全体が、みなUFOを目撃してから、自分たちが宇宙人であると自覚するようになる。ここで注目したいのは、はっきり記憶に残っている地上の記憶を「贗物の歴史」と見なし、記憶から消された歴史を「本物の歴史」としている所である。ここでも、「本物の歴史」というのは思い込みだけで、失われた記憶を「本物の歴史」といえるような根拠は何一つもない。

周知のとおり、自己のアイデンティティを確立するにあたって、欠かせないのが自己の過去（歴史）を辿ることである。つまり、アイデンティティと歴史は密接な関係があるのである。三島が戦後になって、日本の深層意識を発見したのと、「美しい星」の重一郎が「本物の歴史」を発見したのとは、相通じるところがある。

三島が、「敗戦」による「断絶」の克服を、絶対的な拠り所の再構築によって成し遂げようとしたプロセスは、一九六〇年代に書かれたテキストの中に数多く見受けられる。一九六〇年代の日本という時空間の中で三島は、絶対的な拠り所の再構築を「歴史を書き直す」ことにより実現させようとしたのである。即ち、三島は、文学作品という装置を用いて「歴史を書き直し」、「日本伝統」や、絶対的な拠り所としての「天皇」をも復元しようとしたのである。「歴史を書き直す」ということはつまり、過去の苦痛を克服する手段であり、また、起源を創造することでもある。二・二六事件三部作において、「歴史」が「物語」となり、『美しい星』において、自らのアイデンティティを確立するために「創造された起源＝歴史」が創られていることは、三島による「歴史の書き直し」の特性を示す一例として捉えることが出来るだろう。一九六〇年代の三島のテキストを貫いているのは、「歴史を書き直す」行為に他ならない。

次の引用は、『十日の菊』の一場面であるが、三島の歴史認識がよく表れていると考えられるせりふである。女主人公の菊は、自分の息子が自分のせいで自決してしまったという罪責感を持っている。菊はこういった傷痕を乗り越えることを「歴史を書き直す」という言葉で表現している。

森 歴史はもう書かれてしまつた。え？さうだらう？もう誰も歴史を書き直すことなんかできつこない。いはばお前は六日のあやめ十日の菊になつたのだ。

菊 本当にさうでございませうか。旦那様。

森 本当にさう、とは？

菊 いいえ、旦那様が仰言るやうに、歴史は書き直すことなんかできないものでございませうか？よしんば書き直せなくても、そのときの綻びを、あとになつて繕ふことはできないものでございませうか？³⁹⁾

菊は、息子の正一が自分のせいで自決した傷痕を乗り越えるため、歴史を書き直そうとしている。歴史を書き直せば、過去の苦痛を癒すことができる。「よしんば書き直せなくても、そのときの綻びを、あとになつて繕ふことはできないものでございませうか」というせりふからわかるように、菊は巨大な時代の流れの中でも、個人の力という微視的観点から出発して、歴史の書き直しに挑んでいるのである。これは、まさに三島由紀夫の歴史認識と相通じていると考えられる。

一九六〇年代に入って、様々な変化を見せた三島由紀夫は、「英霊の声」に至って、自らの論理を完成したと考えられる。その根拠は、「英霊の声」の以後に書かれた、「文化防衛論」、「道義的革命」の論理一磯部一等主計の遺稿について」などは、「英霊の声」を裏付けるために書かれた側面が強いからである。そして、一九六八年に書いた「文化防衛論」では、三島の主張する「文化的天皇」が「現行憲法下法理的に可能な方法だと思はれる」と述べているのに対し、三島が自決の際、最後に行った演説では、「憲法改正」を訴えるなど、益々激化する傾向は認められるものの、「英霊の声」以

39) 三島由紀夫「十日の菊」『文学界』1961年12月号（『決定版三島由紀夫全集23』、新潮社、453頁）

後は、ある程度、論理的一貫性を保っている。つまり、三島にとって、一九六〇年代から一九六六年までの間は、「連続性」の根拠を求めて、様々に模索した時期であると考えられる。それ故、一九六〇年代初期には、多様なテーマを持つ多くの作品が生まれ、「大衆消費文化」を賞賛したり、「オリンピック」に興奮したりする姿も見せているのであろう。それに対し、一九六六年以後は、「豊饒の海」四部作以外は、文学作品の創作の数が減り、「楯の会」などの対外活動が増えたのである。

以上のようなことを考慮すると、三島は、常に時代の荒波に反応しながら、自分の考えを変化させ、それを作品に表わし、行動してきたことがわかる。つまり、三島由紀夫は、戦後日本における一九六〇年代という、目まぐるしい混沌の中で、自分のアイデンティティを模索しながら、不安定な状況から逃れるための絶対的な拠り所を探るに至ったと考えられる。外的状況の変化と戦いながらなされた三島のアイデンティティの探求は、日本という国の歴史に注目することに端を発し、「アイデンティティ」と「連続性」の根幹となる「天皇制」の問題を穿鑿して、最終的には「歴史を書き直す」試みに至ったのである。つまり、三島が「歴史の書き直し」により再構築した「日本伝統」とは、「戦後」になったからこそ存在する、事後的に構築された「日本伝統」、幻の「日本伝統」であったのではなかろうか。

* 本稿は『一九六〇年代の三島由紀夫と戦後日本』（二〇〇八年度 筑波大学博士論文）の一部を基に加筆・修正したものである。